

13. 狭い門からは入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいつて行く者が多いのです。

14. いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

## 説教

カルヴァンの『キリスト教綱要』1561年版のタイトルページには、二つの門の絵がついています。一つには、入り口に花が一面に咲き匂っている広々とした門があり、その頂には炎が燃えています。もう一つは、茨が生い茂った狭い門ですが、その頂上には冠が描かれています。

イエスさまは、山上の説教の締め括りとして、三つのたとえを話します。その最初は「狭い門」と「広い門」のたとえで、二つ目は「良い実を結ぶ良い木」と「悪い実を結ぶ悪い木」のたとえ、そして三つ目は「岩の上に立てた家」と「砂の上に立てた家」のたとえです。今日学ぶのはその最初の「狭い門」と「大きな門」のたとえです。

イエスさまは、ご自身の説教をただ聞くだけにはなさいません。教えたことを信じて、実践することを求めます。神のことは絵に描いた餅ではありません。神のことは、一度語られたら空中に消え去る空しいものではありません。必ずその通りに成就します。神がひとたび人間に語られるや、それを信じるか信じないか、それに聞き従うか逆らうか、私たち人間には二つに一つの選択しかありません。

イエスさまは、私たちの前には「狭い門」と「大きな門」とが開かれていると言われます。そして、「大きな門」からではなく、「狭い門から入れ」と命じるのです。なぜなら、もう一方の「大きな門」は、別名「滅びに至る門」であるからです。13節後半の直訳はこうです。「滅びへと連れて行く門は大きく開かれ、道は広々としている。そこから入る者が多い。」靖国神社の大鳥居は有名ですが、誰にでも開かれていて、しかも入りやすいので、この「大きな門」からは多くの人々が入って行きます。そして、門をくぐって入って行った先には、これまた広々とした道が広がっていて、実に快適です。大勢の人々が同じ方向を目指してどっと流れていくのですから、その流れに乗って行けばいいので楽です。でも、その先に何が待ち受けているかと言えば、滅びです。大きな門、広い道は、簡単で、行きやすく、快適で、楽なのですが、その先には「滅び」が待ち受けています。

地球が丸い事実を知らない時代には、どこまでも真っ平らな海を行った先には、そのまま垂直になだれ落ちる「地の果て」があると考えられていましたが、広い道の「果て」には奈落が待ち受けています。カルヴァンの『綱要』の挿絵で言えば、広い道の結末は永遠の滅びである「地獄」です。ですからイエスさまは、「大きな門」からではなく、「狭い門から入れ」と教えてくださっているのです。この「狭い門」は、文字通り狭くて、それを見つけることも、そこから入ることもままならないのですが、それでも、そこから入って、その先にある「狭い道」をずうっと歩いて行くなれば、その先には「いのち」があります。すなわち、地獄ではなく、天国に行くのです。

それでは、「狭い門」とは何を意味するのでしょうか。それはイエス・キリストです。これまでイエスさまが説教なさってきたことすべてが「狭い門」「狭い道」なのですが、最も単純にこれを表現するならば、イエスさまがそこから入れと命じる「狭い門」とは、要するに、イエスさまご自身のことです。本来、神に逆らう罪人は天国に行くことはできず、天国に行くには完璧に神に従う正しい人、すなわち義人でなければなりません。とは言え、天

国に入ることのできるほどの「義」は、最初の人間アダム以来誰も持ちあわせてはおらず、その「義」を持っているのは、神のひとり子イエスさまだけです。そして神は、義人であるイエスさまを罪人である私たちの身代わりとして十字架で殺すことにより、私たちの罪をキリストに転嫁し、キリストの義を私たち罪人に転嫁なさいました。これにより、イエスさまは神に見捨てられて十字架で死に、私たちはキリストの義をまもって天国に行くことができます。これ以外に、罪人が天国に行く道はありません。後に使徒ペテロは「この方以外に救いはない」と人々に説教しました。「わたしは道であり真理でありいのちなのです。」「誰でもわたしを通してでなければ父なる神のもとに行くことはできない。」とイエスさまは教えてくださいました。この方以外に救いはありません。この方こそ天国に至る救いの道です。

創世記を見ると、最初の人間アダムとエヴァは、神の前に罪を犯して、エデンの園から追放されました。そこには「いのちの木」があり、それを食べると永遠に生きることができたのですが、神の言うことを聞かず自分勝手に生きるようになってしまった人間が永遠に生きることのないようにということで、追放されてしまったのです。エデンの園の入り口には、炎の剣を振りかざす天使が門番となって、罪人が入らないよう守っています。このため、罪人が無理やりそこに押し入ろうとしても、天使の振り回す炎の剣で八つ裂きにされ、焼き尽くされてしまい、誰も入ることができません。

それでは、もう永遠に人はそこに入ることはできないのでしょうか。罪人が永遠の樂園であるエデンの園に入る道はどこにもないのでしょくか。あります。それがイエスさまを通しての道です。エデンの園を追放された罪人がまた再びそこに入る唯一の道は、その罪人の身代わりに誰かが神の怒りとさばきを受けて殺されるという以外には無いのですが、イエスさまはその身代わりのいけにえとなりました。すなわち、義人であるイエスさまが、罪人の身代わりとなって、神の怒りとさばきを受けることによって、人は救われます。罪人が罪人でありながら、神の怒りとさばきを免れることができるのです。キリストが身代わりとなって神のさばきを受けてくださったので、もう神のさばきを受ける必要が無いのです。罪人だけれども、神の怒りを受けて当然だけれども、何一つ神のみこころにかなう良いことをなし得ないのだけれども、それでも救われるのです。キリストが、この私の身代わりとなって十字架で死んで、神のさばきを残らず受けてくださったことにより、天国に行くことができます。人は、この方によって救われます。キリストこそ救いに至る唯一の道です。イエスさまは、罪人がエデンの園に入る救いの門となってくださいました。罪人の身代わりになって死なれたイエスさまが、「いのちに至る門」となってくださいました。この方に救いがあります。この方こそ救い主です。天下に、この方以外、救いはありません。

この世には多くの宗教があり、哲学があり、無神論を含めたイデオロギーが渦巻いております。でも、地獄の滅びを免れて天国に至る唯一の道は、キリスト以外にありません。どんなに立派で高尚な哲学や宗教も、人を罪と滅びから救うことはできないからです。神の前に罪を犯した罪人を、神の怒りと呪いから救い出すことはできません。

罪とは誰かに対して犯すものです。神に対して罪を犯せば、神のさばきを受けます。神の怒りと呪いを受けます。最後の審判が待ち受けています。神の怒りの炎に焼き尽くされて、永遠に滅びなければなりません。「罪から来る報酬は死」で、人間は自分の罪の故に「死に」、加えて、「第二の死」である永遠のさばきを受けなければなりません。永遠に神に見捨てられて、地獄で苦しまなければならないことは、どんなに恐ろしいことでしょうか。ですから、自分が罪人だと悟ったとしても、この差し迫る永遠の審判から逃れることができなければ何の意味もありません。そして、神の審判から逃れる道は、自分の身代わりに神のさばきを受ける「いけにえ」以外にはありません。すなわち、罪と汚れに満ちた人間を罪と滅びから救い出すことができるのは、罪人の身代わりとなって十字架で死なれた神の小羊、イエス・キリストだけです。キリストこそ救いの門です。いのちに至る「狭い門」です。

イエスさまは言われます。「いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」イエス

さまは、いのちに至る門は狭いので、「それを見いだす者はまれ」だと言われます。北区の、赤羽で、この赤羽聖書教会の入り口はまさしく「狭い門」です。北区の総人口は約 33 万人だそうです、そのうち主日にイエスさまに会いに教会に来る人はほんの僅かです。「門」も狭いのですが、それをくぐって中に入っても、そこにはこれまた「狭い道」が続いています。この「狭い道」の「狭い」と訳される言葉は、「狭い門」の「狭い」とは異なる言葉が使われます。これは「圧迫される、混み合っている、苦勞する、苦難に遭う、困る」を意味します。救いに至る「狭い門」は救い主であるイエスさまでしたが、イエスさまを通過して中に入ると、そこに続いていく道は「狭い道」です。それは窮屈で、右左からゴツゴツと圧迫されて、進み行くのに苦勞する道です。

どうしてそうなるのでしょうか。それはイエスさまに聞き従う道だからです。これまで 5 章以降イエスさまから教えられてきた道です。それらの一つ一つを思い出せばわかる通り、イエスさまに聞き従う道は、この世の人々の行く道と全く正反対です。姦淫の世にあって姦淫しません。人を殺す世にあって人を殺しません。盗む世にあって盗みません。嘘偽り渦巻く世にあって真実を語ります。イエスさまに聞き従う者は、この世の流れに逆らって主に従っていきます。だから、ゴツゴツと圧迫されます。狭くて窮屈です。苦勞が絶えません。時流に逆らわず、この世の流れに従って進んで行けば楽ですが、時代に逆行するのは大変です。

それでもイエスさまは、「広い道」を行かず「狭い道」を行けと命じます。「大きい門」から入らず、「狭い門」から入れ」と言われます。なぜなら、どんなに楽でも、どんなに楽しく快適でも、「滅びに至る門は広い」からです。そして「いのちに至る門は小さく、その道は狭い」のです。今は楽しく快適でも、その結末は滅びに至る「大きい門」「広い道」ではなく、今は苦勞しても、いのちに至る「狭い門」「狭い道」を行きましょう。